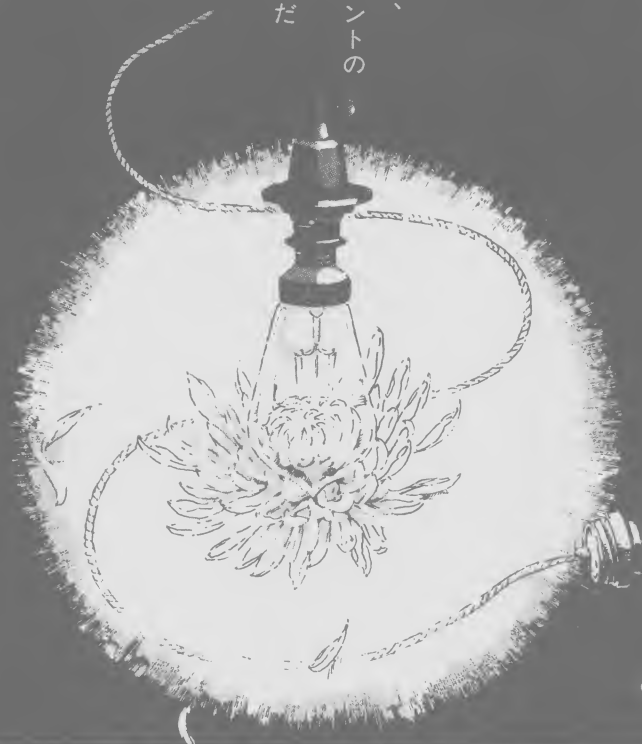
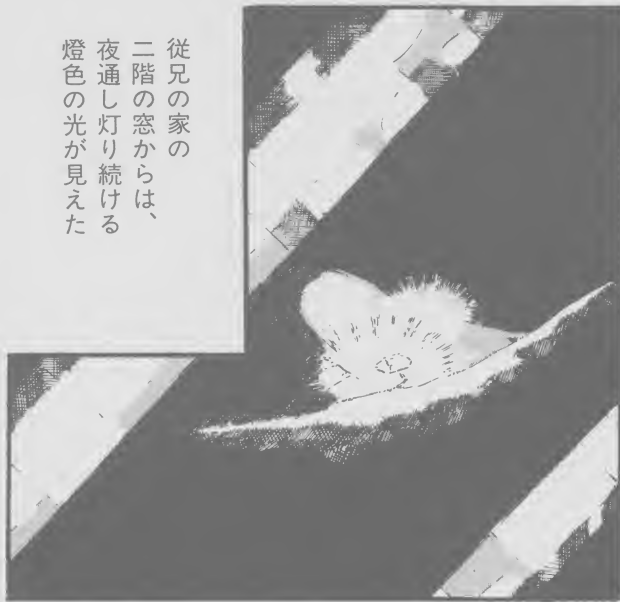
Chrysanthème
Bleue
X Acte I
X Acte II
X Acte III
(Tu veux allumer,
s'il te plaît) ...

青い菊
(Chrysanthème Bleue)
Acte I
鳩山郁子

水銀石英灯の、
青いフィラメントの
花芯だと
思っていたんだ

菊達は
人口灯の真昼を錯覚する
電照菊は
眠らないんだ
従兄の家の
二階の窓からは、
夜通し灯り続ける
燈色の光が見えた

白熱灯は
個々の太陽の様に
菊達の上に君臨しており、
蕾を結ぼれさせたままに
おし留めていた
けれども、もし
電気菊だったなら
――それは実のところ
電照菊であったのだけど――
中心にゆく程蒼味掛った
電気菊の花それ自体が
光を放つものでは
なかっただろうか？

僕の眠りの中で、
あたかも
常夜燈ででも
あるかのように

杏利、
黒板は見えるね
後ろの席に
つきなさい

青菊の
隣りだ
青菊の隣り

aogiku
....

出席を
とります
有川
ハイ

君ん家、電照やってるの

あの、一緒に弁当つかわせて貰っていいかしら

いいよ座れよ

誰に聞いたんだい
え？
家が電照栽培をやってるってことさ

だって、君の名字はキヨソネだろ

この辺りで
電照栽培をやってる
のは一軒だけだし…
すぐ分かったよ

転入したばかりで
詳しいじゃないか
僕、子供の頃から
この辺りのことは
よく知ってるんだ
菊節句の頃は
特にね

菊節句か
そういえばもう
そんな時季なんじゃ
ないか

あんなに凄い
人口灯なのに
——夜中は
眩しくないの？
………

僕はそんなに
眠そうな眼を
してるかな

眩しくたって
——眼をつむって
しまえば
夜中と同じ事じゃ
ないか

そりゃそうだけど
……それは
君のあの仇名と
関係あるのかい

ちぇッ他人の事
ラパンさんみたいな
名前で呼びやがる

君の家の
温室に青い菊が
あるから…だから
皆がそう呼ぶの
かしら

君はどう思うんだ
皆がそういうなら
本当にあるって
思うかい

僕は
──先からあるんじゃ
ないかって思ってた

参ったな
そんな大袈裟な
返答をされるとは
思わなかった

君の名前、
何といったっけ
杏利ヒロシゲ

ヒロシゲじゃあ
浮世絵だな
僕は名字の方を
呼ぶことにするよ

バイバイ
！杏利

——何だか
仇名の理由を
はぐらかされちまった
みたいだな

お帰んなさい
美砂子からの
手紙がありますよ

今日は母さんかあ
二人共三日と置かず
書いてよこすなあ

Jugend,
du voll Klingen
(350V)
280V

千晶さん、
六球スーパー
出来た…

おう、広か
入れよ

du voll Klingen und
Singen du

あー、
ちゃんと音が
出てる

学校の方は
どうだったんだい
うん……
まあまあ
――

キヨソネって子と
話した
電照やってる
家の子だよ

へえ、
やっぱりちょっとは
変わったところの
ある子かい

少しぶっきらぼうな
ところはあるけど、
別にそれ程じゃあ
ない

どうして?
あの子の家にだけ
電照温室が
あるから――

あー
…清曽根さんは
別に変わった人じゃない
あの人は菊の
掛けあわせを長く
やっているらしいけど

だからそう
言われるの、それとも
あの子の父さんは
よっぽど変わった人
？

この辺りの
隣組は独得でね、
あの人の家の温室は
隣組の人達が
当面の費用を
肩代りして建てたもの
なんだ

もちろん、
それだけ益が
あると見込んで
出資したんだ
ろうけどね

その見込みは、
どうなったんだろう

新しい菊の品種を、
電照栽培で
作りだそうとしたんで
しょう？

そうなんだが、何年経っても清曽根さんは何一つ明らかにしようとはしないんだな
新しい品種の菊は隣組の中だけで独占栽培するつもりだったらしいから、皆にしてみれば何か疑いたくなるんじゃないか
千晶さん、青い菊って知ってる…
青い菊？さあ、どこかで聞いたかな――広、誰からそれを聞いたんだい
いや、何でもないんだ
青い菊の流言

biii—
mmmi—

まだ灯っていない
——日没前
だからかな

きゃべつ巻き、
もっと食べる？
いや、
もういっぱいだ
青菊、
部屋に戻る前に
温室の灯りを
点けておいてくれ
父さん、僕は
侠だ

バッツン

〈つづく〉